

箆

箆や書棚など家具を十近く解体し、そこを押し入れとにぎゅう詰めに使われていた衣類や本や小物を捨て、どうやら出口が見えてきた。ここまで費やした時間と労力を思うと、亡き両親について小言を思い浮かべたりするのだが、

「そら、おらのでないで。お前のもんだねかや。」

と言われてしまうものも出てくるので、てへっ、と舌を出して、

「まあ、二代分の終活ってことで。」

とあの世の両親に言い訳をしつつ作業を続ける。

妻に言わせると、取り憑かれたようにかたづけをしているので、ご近所から期せずして同情を買ったりする。年寄りばかりの町内になっていたので、当てつけになっていくかもしれないなあとも思う。

「うちもゴミ屋敷ですわ。でもかたづけは、私も主人もとてもできんと思います。ようされませぬえ。」

確かに、自分が想像していた以上の重労働ではあ

る。仕事を続けていたら、とてもじゃないが無理である。ええ、まあ、などと相づちを打っていたら、その奥さんにとつても重要事項であるらしく、話が続いていく。

「おばあちゃんも、自分が死んだら業者にかたづけてもらって欲しくて言っています。」

ぼくも当然それは考えて、調べもした。経費もかなりかかるので、業者に依頼すれば済むといった単純な話ではない。ぼくの場合は、退職して時間があることと、こつこつと肉体労働を続けて、自身の健康保持と経費節約の両得をねらうこと、かたづけながら実家と自分の行く末を考える機会にすること、などなど考えて自分ですることを選択したが、それをしたくてもできない人が少なくないだろうとは容易に想像が付く。恵まれているのだと気づく。

ついに処理総量が二トンを超え、処分場のおじさんには、広い家だねえ、とこれまた半笑いでからかわれるに至る。持ち場が変わって受付で顔を合わせないときは、わざわざ向こうからぼくの姿を見ると声をかけて歩み寄ってくるおじさんなので、腹も立たない。

「今日も来られましたな。」

「毎日来ないと気が済まんようになりました。」

二人で声を上げて笑う。毎日ゴミと付き合うプロにしてみれば、ぼくが何をしているのかなんてお見通しに違いない。彼流で励ましてくれてるんだと思う。

処分場通いが重荷でなくなるように。

実家には、ずいぶん隙間が生まれた。風の流れが目に見えるようだ。掃除機の鼻先を突つ込むのが精一杯だったところを裸足になって雑巾がけをした。



専業ババ奮闘記 (その2) 53

木幡智恵美

ババルウ星人 (4)

新型コロナウイルス感染者が広がり、松江でもクラスターが起きてから、寛大と実歩は保育所を休ませることになった。忠ちゃんがお休みの日曜日を除き、義母が家にいる日は娘が三人の子どもを連れて我が家へ、デイサービスがある日は私が玉湯に行つて子守という日々が始まった。

このところ、お母さん以外は受け付けない宗矢。玉湯の家に着くなり、実歩の葉をもらいに行つてくると娘が言うので、そんな宗矢も含め三人を預かることになった。平仮名が読めるようになった寛大は、絵本を開いて読んでいる。実歩は私にまとわりついてくるけれども、宗矢を抱っこしているのになかなか相手をしやれない。その宗矢はというと、お母さんがいなくなった途端泣き始め、あやしても、実歩に頼んでマーケット袋をぐしゃぐしゃと鳴らしても、一向に泣き止まない。一時間泣き続けた後、眉をしかめたままの顔で寝た。ようやく腕の中で宗矢が眠つて三十分ほど経つた頃、娘が帰ってきた。

前に住んでいた住宅街にあるアパートとは違い、新居の裏は山、庭が広く、少し歩くと集会所があり、そこには公園もある。宗矢の目が覚めてから、その公園に歩いて行つた。空模様は怪しくなつたので、早々に引き上げるが、あと少しで家だというところで雨が降り出した。道路わきの家の軒先に入る。小さい子二人の足と乳母車を押してでは十メートルも歩けばびしょ濡れだ。「車取つて来るわ」と娘が走つて家に向かった。目と鼻の先にある家に娘の車でたどり着き、はあつため息を吐く。

昼食後、寛大と実歩に絵本を読んでやる。字が読めるようになってきた寛大は、自分で読みたがる。絵本の後、昔話をしてやると、実歩、寛大と順に寝息が聞こえてきた。娘と宗矢も眠り、することが無くなつた私は散歩に出かける。幸い雨は上がつていた。

散歩から帰ると、昼寝から起きた寛大や実歩と遊び、締めは寛大と戦いごっこ。「ババルウ星人だ」「スペシウム光線、発射!」という具合に。

30代フリーター やあ、ジイさん。秋篠宮文仁の長女・眞子との婚約が内定している小室圭への週刊誌のバッシングが止まらない。

年金生活者 皇室の権威の低下がここまでであらわになったことはかつてない。天皇制の基盤にある水稲耕作が資本主義の高度化によって稀少産業に近いものになっていくことを背景として考えないわけにはいかない。

30代 先日朝日新聞の朝刊に掲載された週刊女性の広告にはこんな言葉が並んでいた。「小室圭さん(29)眞子さま(29)との新婚生活で――1年目だけで看過できない税金『3億円』乱費」(5月25日号)。まだ結婚してもしないのに、もう「乱費」したかのような書き方は芸能人に対してさえしないのではないか。皇室相手なら名誉棄損で訴えられる心配もないと踏んでいるのか。

年金 以前なら皇族の婚約内定者をしたくことは、皇族をたたくことに等しいとみなされ、タブー視されたはずだ。  
水稲耕作が稀少産業に近づいていくのはもはや止めようがない。水稲を守れ、と訴えても耳を傾けるのは少数でしかない。それなら「水稲」の問題を「水」の問題に拡張して「水を守れ」と訴えれば世界的な普遍性を獲得し得るはずだ。それが水稲を守ることにもつながる。彼はそう考えていると想像できる。

30代 世界の空気を読んでいられるわけだ。  
年金 「人々の願ひと努力が実を結び平らげき世の到るを祈る」

今年の歌会始で紹介された現天皇の歌だ。まるで小中学生から募集した何かの標語のようなこの作品は、凡庸に徹することによって自らの存在感を抑えることを「象徴」の務めとしようとする意志を感じさせる。

「学舎(まなびや)にひびかふ子らの弾む声さやけくあれとひたすら望む」(2020年)

天皇就任後初の歌会始で披露されたこの作品も凡庸だが、今年の歌はそれ

だ。それが今は皇族本人までたたくところまでエスカレートしている。週刊文春のウェブサイトに「『甘いのよ』小室圭さんを叱った 眞子さま暴走愛(全内幕)」(5月6日・13日号)との見出しが広告として掲載されている。

資本主義の高度化は選択的消費が必需的消費と肩を並べる消費の過剰化をもたらし、それが国家から個人への権力の分散を促した。そのぶん天皇の権威も低下した。現天皇は戦争を遂行した昭和天皇のような威厳もなければ、平和を追い求めた前天皇のような能动性も見られない。本人は右にも左にも偏らないニュートラルな姿勢を目指しているように見え、それが軽みにつながつている。

英国王室の内情をあばく大衆紙の記事のような週刊誌の皇室たたきは、国家から分散した権力を手にして相応の処遇を求めるようになった国民が、そのぶん皇室を相対化して見るようになり、かつてほど崇めなくなったことを

に輪をかけ、洗練すら感じられる。前天皇や昭和天皇の作品と比べて読むと、天皇家に伝わる慣習への抵抗ではないかと思えるほどだ。

30代 先代、先々代の歌とどう違うんだ。  
年金 前天皇の現役最後の歌と、昭和天皇の存命中に開かれた最後の歌会始の作品は次のとおりだ。

「贈られしひまはりの種は生え揃ひ葉を広げゆく初夏の光に」(2019年、前天皇)

「国鉄の車にのりておほちちの明治

あらわしている。

30代 バッシングに動じる様子もなく、おのれの考えを貫こうとする小室は見上げたもんだと言えは言える。

年金 彼の皇室を忖度しない態度もまた、皇室の権威の低下が背景にあるということだ。もし小室と同じような立場に立たされたら、たいいてい人間は母親の金銭トラブルをさつきと片づけようとするだろう。皇室の名を汚してはいけない、と。だが、小室はおのれが正当であると信じる部分は譲歩しない。そこには皇室なにするものぞという構えがうかがえる。彼のそんなところに眞子は惹かれたのではないか。

30代 ジイさん、皇室の権威の低下の背景に水稲耕作の縮小があると言ったな。

年金 今の天皇はそれに強い危機感を抱いていると推察される。皇太子時代に国連の「水と衛生に関する諮問委員会」の名誉総裁に就任するなど、世界の「水問題」に取り組んでいるのはそのあらわれと理解することができると

のみ世をおもひみにけり」(1988年、昭和天皇)

皇統を守るために「象徴」を受け入れた先々代は新たな衣裳を身にまとも、敗戦前の帝王の風格を覆い隠すことができなかつた。そのことは、本人が公には何も言わなくても、戦後政治に復古的な要素を忍び込ませる要因になったと思われる。

そうした「象徴」のあり方を変えようとしたのが先代だった。戦地への慰霊の旅を繰り返し、日本国憲法の順守を誓い、事実上の改憲反対のメッセージを發した。そうした歩みを生前退位で締めくくった彼の振る舞いもまた、ベクトルは昭和天皇とは逆向きでも、戦後政治を左右することになった。

こうした2代にわたる復古と進歩の間の振り子のような動きは、現天皇にその揺れを止める役割を与えたと考えることができる。「象徴」の振る舞いが政治性を帯びるのを打ち消す役割と言い換えてもいい。それは歴史の進歩と言える。

ニュース日記 785  
中村 礼治

## 皇室の権威が低下した